

「雪あられ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

雪の結晶は驚くほど美しいのだが、きれいに撮影するのはなかなか難しい。一番試したいのは、今まさに降っている雪の結晶を、拡大撮影する方法だが、これはかなりの技術を要するらしく、私は成功していない。



山荘のベランダに、雪が「うっすらと」積もっていた。この「うっすら」という状態、そして気温が「 -5°C 以下」という点、そして太陽光が当たっていないという条件が、雪の結晶の観察には重要なのだ。



12月下旬から3月上旬にかけては、北軽井沢にも雪が降る。北軽井沢は気候区から見ると「太平洋側の気候」なので、冬型の気圧配置の時には雪が降ることはほとんどない。しかし、南岸低気圧と寒気が同時に来ると、時には大雪になる。上の写真のように積もり始めてしまうと、雪の結晶同士が重なり合ってしまう、地表に落ちた雪の結晶の撮影は、ほとんど不可能になってしまう。



この「うっすらと積もった」という状態だと、雪粒同士が個々に離れていて、一粒一粒の観察には誠に都合が良いのだ。



ある1月の朝、気温は -7°C と、この時期の標高1100mの高原としては平均的な寒さだった。どうやら夜半に少し降雪があったようだ。



肉眼で見ても、雪の結晶が確認できる。見たところ、典型的な樹枝六花(雪印乳業のマークのような結晶)は少なく、少し「いびつな形」のものが多い。どうやらこれは「雪あられ」と呼ばれるものらしい。